

PCIT と PEERS(R) の母子生活支援施設への実装的取り組み

社会福祉法人 ベタニヤホーム 母子生活支援施設ベタニヤホーム

〒130-0022 東京都墨田区江東橋 5-4-1

助成事業の概要

母子生活支援施設に入所する母親は、子どもの頃の逆境的家庭環境で育っていることが多く、子育てについてはより大きな困難を抱えている。そのような親子に PCIT を用いて、エビデンスに基づくより具体的な方法で子育て支援を行う。また思春期以降の子どもには、友達の作り方を理論的に教える方法である、PEERS(R) を実施する。PEERS(R) は一般社団法人 SSTAR が主催している友達の作り方を理論的に教える方法で、コミュニケーションの難しい子どもに対応しており、エビデンスに基づいた SST であることが報告されている。

したがって、子育ての方法をその場で実施しながら取得でき、親子の関係改善にも繋がる PCIT、思春期の子どものコミュニケーションスキル、及びソーシャルスキルの向上を目指す PEERS(R) を、施設内及び地域に展開することを目的とする。

1.PCIT

研修の受講：PCIT イニシャルワークショップを受講

日時：2025 年 4 月 25 ～ 27 日、5 月 24、25 日

7 月より月 1 回のコンサルテーションを受講

2.PEERS(R)

研修受講：PEERS(R) 指導者養成トレーニングセミナー

日時：2025 年 9 月 13 ～ 15 日

2025 年 10 月～ 2026 年 2 月 トレーニング実施

事業の成果

1.PCIT

イニシャルワークショップを受講後、そこでの助言を参考に環境を整えている。また対象となるケースを模索中である。PCIT は CARE にも通ずるため、CARE の理解が深まり、日々の支援の中に取り入れている。

2.PEERS(R)

積極的に他者に声をかけられるが、広く浅くで、継続的な友人関係を築くことができない当施設に入所中の児童 A、コミュニケーションが苦手で友人を作ることが難しい当施設を退所した児童 B を対象に PEERS(R) を実施した。

A は楽しみにしており、やる気を持って参加していた。しかし、自身のこれまでの行動が NG 行動であるとの事実に向き合う苦しさからか、やる気が削がれていく。「やりたくない」との発言もあったが、卒業パーティは楽しみにしていたため、それに出席することを目標にセッションの出席を続ける。そのような中、A は習ったことを学校や施設内で実践しており、その成果が出始める。これまで上手くいかなかった友人とのやり取りが少しずつ上手くいき始める。実際にどのようなやり取りをして、どうなったか、その都度、嬉しそうに報告がある。自信が出てきたことで再びやる気が出てくる。特に関心の高い内容のセッ

セッションでは、事前に断りを入れ、自身のスマートフォンにてポイント等が書かれたホワイトボードを写真に撮っていた。セッション最終日には、これまで仲良くなれなかった施設内の児童と楽しく話することができたと報告があり、実際に双方が楽しそうに会話していた様子を職員が目撃している。

B は“言われたから参加をしている”といった姿勢であった。友人がおらず、家庭内でもあまり会話をしていない B にとって、まず人とのやり取りをする場となった。日頃の会話のなさ故、受け答えがぎこちなく、そもそも言葉が出てこない。友人が欲しいと明言することもできず、「友達まではいかなくても、会話ができる人が欲しい」と、非常に自己肯定感が低い状態であった。セッションが進むにつれ、発言が増えてくる。またアクティビティにおいて、声を上げて笑うようになり、当施設に入所していた頃の B の姿が出てくるようになった。ただ B は実践ができなかった。学校ではほとんど発言をしないまま過ごしてきており、クラスメイトに話しかけるハードルが非常に高くなっていた。学校に入学した当初は話しかけてくれたクラスメイトがいたにも関わらず、返答の仕方が分からずに無視してしまったことを後悔する発言が母親に出てくる。友人作りを諦めていた B が、友人が欲しいことを再認識できたようであった。現在、進学の時期であるため、そこで活かすよう伝えていった。進学の前に実践できる場の提供を検討している。

成果の広報、公表

実施報告は数回セッションを重ねた後に、日本子ども虐待防止学会等で発表を行いたいと考えている。PEERS(R) は発表のために、許可は取った上で、児童の顔は写らないよう配慮して動画を撮影している。ロールプレイの様子について動画を

使いながらの報告になると想定している。母子生活支援施設での実施は、これまで聞いたことがないため、母子生活支援施設での特徴を活かした点、工夫した点、困難だった点等を中心に発表していく。PCIT は動画の公開は困難と思われるため、動画は使用しない事例報告になると想定している。

今後の展開

今回は新たな支援方法の導入段階であったため、必要な資格を整えることに注力した。

PCIT は今年度、導入に至らなかったが、環境整備も含めた準備は進めており、今後、対象ケースのマッチングをしていく。コンサルテーションの受講を続けながら、PCIT 実施を開始次第、スーパービジョンを受けていく。

PEERS(R) は実施まで繋げることができた。職員側の想定以上の効果を児童が発揮している。これまで人との関わり方で気になる所は都度話をしてきたが、理解を促すことができなかった児童が PEERS(R) で学んだことを、理解して実践している。この事実を受け止め、実施を積み上げていく。現在は施設入所児及び退所児を対象としているが、将来的には地域の児童も対象としていきたい。